ていて，業主と被雇者とについて階層分布がわかる。報告者は税引所得の分布を示し，さらに1952—54年度について，生産所得から可處分所得を經て，支出に至る過程を明らかにしようとしている。

わたくしの試みたのは，日本の所得税と營業收益税統計を用いて，從來ほとんど注目されなかった平均水準と分散（不均等度）との關係を明かにしようとしたものである。好況に向うにつれて，平均と分散とはともに上昇する。けれどもその程度はそれぞれ異なる。不況に向うにつれて，平均と分散とは低下するが，やはり程度が異なる。好況と不況との非對稱性もこれによって明らかにされる。さらに，平均と分散とが逆に動くこと，これは景氣の轉回期に出現する。

この日午後は，舟で海へ出る。

Size Distribution IV

9月12日午前：議長　J. Marczewski

H. P. Brown, Estimation of Income Distribution in Australia.

Simon A. Goldberg and Jenny R. Pedluk, Income Size Distribution Statistics and Research in Canada.

オーストラリアの所得分布は男女別・年齢別にパレート係數を算出して比較している。また，カナダの所得統計も整備し，ことに1952年の「所得調査」は免税點以下をも包括するものである。ただ，質問票による仕方のため，過小申告と脱漏が甚しい。一般に所得分布の資料は，租税統計に限られ，別の所得調査がどれだけ眞實性をもつかは疑わしい。むしろ，租税統計を修正して用いる方が安全でさえある。それより重要なのは方法であって，不均等度の測度についても嚴密な反省が必要である。さもなければ解釋が一義的になくなる。このような感を深くした。

なお同日午後，次の Contributed Papers が讀まれた。

G. Bombach and Daborah Paize, Comparison of the Real Product of the United Kingdom and the United States,

A. L. Gaathon, Short-term Measurement of Economic Performance in an Under-developed Country.

G. Stuvel, An Introduction of Capital Gains and Losses into National Accounting.

次回は1957年オランダで開催，主題は「國富」と決定した。

第9回農業經濟學者國際會議

大　川　一　司

第9回農業經濟學者國際會議（The 9th Meeting of the International Conference of Agricultural Economists）は1955年8月19–26日，ヘルシンキの郊外，林と湖の美しいオタニエミ（Otaniemi）の Technical Students' village に合宿して開かれた。參加者270–80人(國の數は40以上)，それに夫人なども入れての大規模な集り。それでいて專門別の部會を持たずに，初めから終りまで全員一同に會して秩序よく報告と討論が行われた。よく組織された能率のいい，そして愉快な集りであった。今年はとくに共產圈からの參加も數ヵ國からあり多彩であった。3年に1回持たれるこの會議に戰後日本からは初めて出席した。北大の矢島氏，教育大の三澤氏（オックスフォード留學中）とそれに私の3人。美しく飾られた萬國旗の下，フィンランドのマーチ演奏あって會長 Elmhirst 登壇，この會傳統のカウベル（歐洲で放牧の牛のくびにぶらさげる大きな鈴）を鳴らして開會，といった雰圍氣である。言葉は英獨佛，だがイヤホーン完備。(ただしソ連・中共は英語のペーパーでロシヤ語，支那語)，

今年のテーマは The Implications of Technical Change in Agriculture というので，めいめいが好きなテーマで報告をするというのではなく，技術の問題に豫め全報告が統一的に仕組まれた。20日から報告に入ったがまず初日はシムポジュームとして「農業經濟の異った環境の下における技術變化の意味」というテーマが採りあげられた。スカンディナビヤ，フランス，東南歐洲，アジア，南アメリカ，そして北アメリカの六つの報告。しかも一つの報告の中でまた數種のタイプの農業が區別される，たとえばインドの S. R. Sen が受持ったアジアでは後れた自給小農，日本型集約小農，プランテーション，巨大集團農場（中央アジア），遊牧といった具合で，世界の農業のタイプと環境の多彩多樣さをわれわれはいやというほど考えさせられた。これはたしかに早急な一般化，理論化への事實的挑戰である。だがタイプと環境

はもとより別の概念である。東南歐洲を受持ったユーゴーの Krasoveć が自分の國の社會主義化の過程の最大の問題の1つ——農業の集團機械化と小規模集約化の優劣論爭を紹介したことなどにその點ははっきりと現れていた。Sen がアジア農業の發展方向について日本型農業の積極面を強く打出したので，三澤，矢島兩氏がコメントをつけたが，その場の空氣からいわゆる日本型農業の「經濟的含意」に關する分析はかなり強い國際的要求をもつと私は判斷した。

第2日は日曜日にも拘らず報告二つ，晩だけ懇親會という强行ぶり。一つはピエルトリコの R. Colon-Torrens の「社會學的，文化的側面の問題」，他はオックスフォードの Agr. Economics Research Institute (C. Clark が現所長) の J, R. Bellerby の「農業技術の發展が農業者の利益になるか」といった意味の問題。この後の方の報告は問題の限定がはっきりしていて理論的に興味があり，豫定された討論者である西獨の C. von Dietze, アメリカの H. G. Halcrow（この會ではどの報告にも豫定討論者があり，本報告40分にたいし，1人15分づつで問題を展開する仕組）の外カナダの W. Mackenzie, そしてシカゴの T. Schultz 等の活潑な討論があって會場は緊張した。報告は農業の相對的な "Insentive Income" の各國における長期的低位の事實の前提の上に，五つの要因—農產物需要の所得彈力性の小，供給擴大の大きい伸縮性，需要の價格彈力性の小，需要縮小の際の供給の短時伸縮性の小，農業勞働の低い供給價格—の相互關連的作用をとりあげ，技術の農業における進步が農業者に有利に結果しないという歸結を導いた。いわばマーシャル的彈性分析の色彩强く，これにたいし討論者の多くは動態的視點を强調し，結論に反對した。

第3日には「生產技術の變化と販賣，配給の技術の變化の相互作用」（シムポジューム）で，農產物，ミルク，畜產物という具合にわけて商品別の報告と討論があり，さらに「技術變化に必要な追加資金」と「消費の變化の技術への影響」の二つのテーマが午後の日程となった。さらに次の日の午後は「農業と林業の相互關係」と「林業經營への技術變化の影響」が取扱われたが，これらは專門的で私には十分理解できなかった。この第4日の午前にデンマークの J. Petersen が報告した「雇用と就業形態にたいする技術變化の衝擊」にたいして私は豫定討論者となった。Petersen の報告は機械化發展の分析と人口年齡構成變化をとり入れた農業人口構造の變化の分析の二部分からなった。前者はアメリカ，イギリス，スェーデン，デンマークのデータについて，後者はデンマークのみの詳細なデータに據った。しかし兩者を通じて農業勞働力が最近15ヵ年間に15—20%も絕對的に減退したという注目すべき事實が背景となった。私が關說した前半の部分は農業における相對的賃金率の變動が景氣循環的で，それはこの產業からの勞働力の移動率と明かに逆の相關を示すこと，したがって農業における機械化の著しい進展は過去における低賃金による阻止作用が最近除かれた結果であって，それは技術の發展の直接の結果ではないことを指適したものである。したがってそこに農業外のセクターの經濟發展率という問題が登場し，日本における事實との連關も明かとなった。しかしこの報告の討論を通じて，この種の純粹に經濟的な分析方法がこの學會では無條件に受け入れられない空氣のあることを知って私はいささか驚いた。アバーデーンの J. F. Duncan 老教授は學會終了後私どものスコットランド農業視察を親しく指導してくれた人であるが，彼の討論における「非經濟的要因」の强調などは，この空氣のよき代表と感じられた。

第5日には3たびシムポジュームがあり，「制度的要素と技術的發展の關係」が論じられた。土地制度，農場規模，植民の型，政府の役割などについての報告と討論，さらにそれに續いてソ連の K. P. Obolenskij, A. V. Bolgov の報告，「ソ連における農業經濟學のリサーチの方法」，「農業生產の計畫原理」があった。これらは別に短く行われた中共，ポーランドの報告とともに，全體のプログラムからみると「特別參加」といった色彩であったが，質問希望者は大變な數で，私なども幾回かの忍耐强い擧手の後第7番目にようやく機會を與えられて僅か5分間の質問をした，といった情況であった。共產圈から參加した學者とこのように討論しさらに私的にもいろいろ話す機會を持ったことは，望外の收穫であり學問の客觀的發達のため慶賀にたえないと多くの人々は感じたとおもう。しかし共產圈の人々は自分の國の經驗について，まづいこと，困っていることをもっとフランクに客觀的に提示するのでなければ，ともに眞理を探求するという空氣は生れない，と私は思った。

實はソ連の報告者の特別の希望を議長が親切に入れて，質問にたいする答えを一括次の日に延ばしたので，第6日はスケジュールが忙しくなった。この日「農業技術發展と貿易の型の相互關係」，「技術發展計畫にたいする農業經濟學者の貢獻」の報告があり，後者は T. Schultz が擔當したので私の最も期待したところであった。彼は "Organization" に展開したインプット・アウトプット・レイショ方法による技術論に自ら反省を加えて，ここでそれをさらに嚴密化するという內容の報告をした。この統計的表現による能率ないし生產性の著しい向上

（彼はデータをアメリカにのみとる）は，一見解されるように技術發展の效果をそのまま現わすものではない。人間教育（human agent）への投資，外部經濟等の效果に注意すべきであることを强調して，技術發展のプログラムの役割を示したが，やはり彼獨自の見解としては新技術の發展は（新）資本の一形態であり，それ故にそれは資本の他のすべての形態と競爭の關係にある，という點が印象的であった。この報告に關する討論は豫期に反してあまり效果的に展開されず私は殘念におもったが，これもこの學會が或る程度に共通の方法論的基盤をもつには余りに大規模にすぎるという點の現れであったろう。

最後の日は C. Clark の「農業生產性の成長率」，K. L. Robinson の農業技術發展の厚生效果と政治的障害」の二報告。前者は例によって多くの國の時系列に關する計測結果に基く觀察であった。クラークはこうした概算に甘んじているわけではもちろんない。パイオニアとして利用可能なデータを可及的に驅使するという考方に依據している。こんどの報告の中の日本の計數にたいする私の疑問も率直に受入れた。また彼自身が中心になって，この會議中のサイドワークとして，農業生產性の概念と計測，というテーマのもとに關心の深い10數人が數回集って討論する機會を作ったこと，このようにしてこの分野の研究の共同的な進展をはかりたい氣持を彼が熱心にもっていること，等からも彼の研究態度は諒解される。私はアジアから唯一人このグループに參加したが，この分野の研究でこの地域は大分おくれていると率直に感じた。

以上がこの會議の公のプログラムに關する私なりの所感であるが，合宿とそして會の前後に實行された集團視察旅行（フィンランド，スェーデン，デンマーク，ドイツ）を通じてエンジョイした會員相互のフランクな個人的接觸を通じてえた收穫は會議そのものからの收穫にまさるとも劣らなかった。そして日本の農業經濟學が實證的にも理論的にもすでにかなりの國際的水準にあるのに，その諸研究が外國の研究成果との交流をえないのは，こうした公的，私的の接觸の機會の小ないことによるということを痛感した。1958年夏の第10回の會合はインドでもたれることに內定した。「インドならば日本からの參加は必ず多數になるであろう」と私はインド開催說の賛成論でいった。この學會がアジアで開かれるのはこんどが初めてである。日本からの多數の參加が望ましい。終りに N. Westermarck 教授はじめ開催地の會員諸氏，そして事務局諸氏の準備と運營に示された卓越と努力に深く感謝する。(56・2・7)